



■2011 年_予算等審査特別委員会（第 2 日目）総括質疑（2011.03.09）

◎陣内泰子委員 市民自治の会の陣内泰子です。それでは、総括質疑を行います。

2011 年度予算は、地域活性元気計画と銘打たれ、10 年、20 年先の本市の姿を見据えて、6 つの重点項目を柱に財源を配分したとなっています。

まず教育について伺います。通告の順番が変わりますが御了承ください。

教育環境の充実をうたいながらも、この 2011 年度予算、教育費の総額は 2010 年度比でマイナス 26 億円となっています。教育予算については、八王子は他市に比べて大変少ない状況が続いております。2008 年度の決算審議のときに指摘いたしましたのは、中学校費において建設費を除いた教育費の割合が基準財政需要額の 0.69 倍でしかなく、多摩 26 市中最低の水準だということでありました。残念ながら、これは今も変わりません。2009 年度は 0.77 倍、2010 年度も 0.72 倍で、相変わらず多摩 26 市中最低水準にあります。2011 年度予算では、さらに昨年よりも減額になっていることから、教育環境の充実にはほど遠いと言わざるを得ない状況ではないでしょうか。

そこで具体的にお聞きいたします。

まず特別支援教育についてです。3 月 3 日、読売新聞多摩版に特別支援学級への希望者が多く抽せんになったという記事が出ておりました。かなり大きく掲載された記事です。皆さん御存じだと思います。この学校は実は 2 年前も多く希望者があり、学級数をふやして対応したと聞いています。しかも、なかなか入学決定がこの時点でも保護者、生徒へと通知されていなかったということでした。このときの反省として、希望集中に対してどういう対策をとればいいのか並びに具体的にまたどういう対策をこの 2 年間の間にとってこられたのか、まず伺います。

◎佐島指導担当部長 まず入学者が集中をしている中学校の特別支援学級の希望集中についてですけれども、各学校間の指導、それから施設等の環境がございますので、その辺のところの整備を進めていくという意味で、まず特別支援学級を希望する生徒数の増加に対応できるように特別支援学級の設置を計画的に行っているところでございます。

平成 21 年度には柵田中学校、22 年度には由木中学校に知的障害の固定学級を設置するなど、整備を進めているところでございます。

◎陣内泰子委員 今、支援学級をつくってきているというお話でありましたが、そのような中で、でもこの学校に集中をする、そういうことに対してはどういうふうな、何が原因であるか、そのことについてはどう分析されていますか。

◎佐島指導担当部長 希望が集中している中学校につきましては、通常の学級との交流であるとか、共同の学習を積極的に行っているという教育の内容の充実という面があります。

また、通学する際の交通の便がよい、駅の近くであるというようなことから希望者が集中をしているものと考えております。

◎陣内泰子委員 この新聞の記事によると、ここを希望された保護者の方は、担当の先生の指導がよく、行事も充実しており、学校全体として特別支援教育に理解があると感じた、そういうようにこの学校を見学をし、そして希望されたということなんですね。ということは、そしてそういう学校に集中するということが今あるわけですけれども、それについてはなかなか他の学校でこのような、いわゆる学校全体として特別支援教育に理解があるような教育がなされているということが、なかなか広く普及していないということも一つの原因かなというふうに思うんですが、そこら辺はいかがでしょうか。

◎佐島指導担当部長 御指摘の中学校については、非常に評価をされているということについてはうれしく思っているところですが、一方で他の学級の状況はどうかということ考えたときに、それぞれの学級で在籍をしている子どもの状況や学校の施設の環境等に応じて特色のある取り組みは進めていただいているというふうには思っております。

しかしながら、教員の指導というような面でやはり子どもに、ひとりひとりに寄り添う教育の中身をもっと充実をしていくという必要があると思いますので、学級の選択の要件として教育の内容の充実ということが挙げられるとすれば、その内容の充実に向けて一層教員の研修等を充実をしていきたいというふうに考えております。

◎陣内泰子委員 まさに学級のハードとしてのキャパシティを広げると同時に、今、指導部長のほうからもありましたように、内容の充実、質の向上をやはり図っていかねれば、このような事態ということは今後も幾つかの学校で起こり得るということになるかと懸念いたしますので、それについてはしっかりと取り組んでいただきたいと思います。

そして、今回のケースについてなんですけれども、今回、昨年10月までにおいて16名の方が希望を出している、その時点で定員オーバーというふうにはわかっていたにもかかわらず、十分にこの保護者、生徒の方たちに対して、そういった周知、指導、対策がなされてこなかったのではないかとというふうに新聞記事を読むと思うわけですが、そこら辺はどのように対応されたんでしょうか。

◎佐島指導担当部長 結果的に希望される学級を移っていただいたお子さん、保護者のお気持ちを考えますと、やはり情報の提供であるとか抽せんの可能性についてお知らせするとい

うことについては十分でなかった部分はあると思います。

しかし、10月の以前から小学校の固定学級に通っている保護者の方々には、体験や見学の際に、学校を通じて、希望してもこの中学校については定員オーバーしているので受け入れをすることは難しい状況にあるということは繰り返し伝えてまいりました。また、就学相談室へのお問い合わせがあった場合にも受け入れが厳しい状況がありますので、第二、第三希望の学校へ移っていただけないかということで体験や見学を進めてきたところでございます。

◎陣内泰子委員　なかなかそういう個別の対応というのは、多分自分は大丈夫だろうとみんな思うわけで十分な効果を果たしてこなかったということもあると思います。

そういう中で、もう少しその対応についての工夫が必要であったのではないかなと思います。そして、そういう中で、私は抽せんになったということ、それは本当に何かあるまじきことなんだろうなというふうに思うんですね。そこら辺については抽せん以外の方法はなかったのか、それについてお聞きしたいし、また最終的な抽せんになるということ判断されたのは教育長かと思うんですけども、教育長自身、この2年間の特別支援教育の推進の水準化がなかなか平準化してこなかった、そういう中である特定の学校に集中をした、そういう教育委員会としての対応のおくれもあったということ、そういう中で、なおかつ抽せんにして保護者の方に負担をかけてしまう、そのことに対しての教育長のお気持ち、そこら辺もあわせてお伺いしたいと思います。

◎石川教育長　特別支援教育については、これから非常に大きな課題になるというふうにもう大分前から受けとめておりまして、この問題については私どもも関心を持って対応してきたところではあります。特別支援教育センターの立ち上げですとかその機能化、また巡回相談等もやってきているところなんですけれども、今回はいかんせんその子どもや保護者に寄り添った形で担当が十分に粘り強く説明をしてきたところなんですけれども、結果として第2希望、第3希望に回っていただけなかった、こんなことがありまして、今から思えば、ある時期を切って、この時期以降については抽せんになりますよということをもっと早く言わなければいけなかった、その辺にミスがあるんだというふうに思っています。今後はこのミスをしっかり次に生かしていきたい、そんな思いであります。

いずれにしましても、しばらくの間、ずっとふえるかどうかはわかりませんが、特別支援が必要な子どもたちというのはふえる傾向にありますので、それに向けて何らかの対策を考えていきたいと思っております。

◎陣内泰子委員　ぜひ、これはゆめおり教育プランにも書かれていることでもありますし、再三教育長のほうからも大きな課題であるということはお聞きしています。そういう中でこういう対応になったということは大変残念に思うと同時に、今後においては積極的にしっかり取り組んでいただきたい。

その一つとして、今回、第2希望、第3希望に回られたその方々、10名いらっしゃるわけですね。そういう中では本当に抽せんから1週間の間に次の学校を決めなさいと言われていて。それはちょうど連休が重なり、実際に学校見学に行けたのは3日しかないという話も聞いているところです。本当にこの特別支援学級に入学を希望するお子さんに関しては、2年、3年かけていろいろな学校を見学をし、そして自分のお子さんに多分合うだろうと思うところを選んできた中で、落ちた方がその3日の間に選ばざるを得ない。そういう中でそのお子さんの対応の問題ですね、なかなか切りかえができないとか、今までずっとこの学校に行くんだと思い込んでいたのが突如別な学校になったということで、今後の4月以降の積極的なサポートも必要かと思えます。

そういう中で、学校現場、また保護者だけにサポートを任せるのではなくて、ぜひせめて1学期の間だけでも必要があれば、そういうお子さんが通われている学級に対しての支援員の増員など、そういうような具体的な応援もしていただきたいと思うんですが、そのあたりはいかがでしょうか。

◎佐島指導担当部長 抽せんにも漏れた方でほかの学校に移っていただくに当たって、2月10日までというような形で期限を切ってお話を申し上げましたが、やはりなかなか決め切れないということで、期限までには結論が出せませんという方もいらっしゃいました。その方々については、その後も見学等をしていただいたり、相談活動を継続いたしまして、現在は全員希望の固定学級に入るという状況になっております。

ただし、学校に入ったらそれで終わりということではありませんので、教育委員会として、新しい年度になりまして、その学級の状況を把握をしながら、その中で、例えば人の支援が欲しいというような要望が上がってくるとか、さまざまなことが考えられますので、その状況をしっかり把握をしながら支援をしてまいりたいと思えます。

◎陣内泰子委員 ぜひよろしく願いいたします。そして、今回の場合は特別支援学級の問題でありましたが、また年度末になってくると特別支援教育、通常の学級の中でいろいろな問題、課題を抱えたお子さんたちのサポート、その学校サポートの予算がもう底をついたとか、足りないとか、2月、3月になるとサポート員がいなくて、無償で来てもらわざるを得ないとか、いろいろな問題があって、予算が本当に足りないということが今回もまた浮き上がってきております。

そのような中で、私はずっと2007年以降、毎年文科省から配分される地方財政措置の特別支援教育支援員配置事業費、これはおおむね1校当たり120万円程度の予算で総額において1億3,000万円以上、これが八王子の場合には配分されています。これは一般財源の中でのものでありますが、こういった文科省がきちんとつけてきている、地方財政措置の中ではありますが、来ている財源に関してはごちゃ混ぜにしないでしっかりとその目的に使っていただきたいと思えますが、この点については教育委員会としていかがお考えでしょうか。

◎佐島指導担当部長 特別支援教育にかかわる学校からの要望の中でも、人の支援が欲しいという声は大変大きいところがございます。そのところを教育委員会としても受けとめまして、例えば学校サポーターの予算については今年度 500 万円ほど増額をしているところがございます。

お話をいただきました 1 校当たり 120 万円のお金でございますけれども、具体的には今申し上げました学校サポーターであるとか、特別支援教育にかかわるボランティア、それから特別支援学級における指導補助員や支援員等をお願いをする予算として措置をしているところがございます。

◎陣内泰子委員 このお金については今御説明がありましたけれども、もっと使っていただきたい。確かにこの 2003 年度予算、ふえていることは承知しています。でも 500 万円ふえた。そういう中で、今御説明にあったものを全部足し合わせても、まだ本当に支援員費として文科省のほうから来ているものだけでも少ない額になっていることを考えるならば、もっともっと、今後何が大切かということの優先順位としてこの教育費の増額、特に特別支援教育へのサポートの予算というのをしっかりと獲得していただきたいと思っています。それはまさに予算がないのではなくて、しっかりと予算を取らない、取ってこれない、きちんと政策に結びつけて予算を獲得するというのを教育委員会としても今後やっていっていただきたいと思っておりますので、お願いいたします。

次に、学校図書館についてです。

学校図書館サポート事業が始まって 1 年になります。この充実に向けても何回となくいろいろな機会あるごとに質問をしてみましたが、そのような中で、学校図書館の実態調査、それを昨年のときに取り組んでいるというような御答弁もあったわけです。それが今後の学校図書館の充実に向けてこの実態調査、どのような調査が行われ、またその結果が生かされていくのか、どのように分析されているのか、そのあたりについてお伺いいたします。

◎佐島指導担当部長 お話にございました読書指導員、学校図書ボランティア等の学校図書館にかかわる活動状況についての調査でございますけれども、具体的な内容としては、読書指導員や図書ボランティアの人数、それから活動の内容、活動日数などについてでございます。

簡単に内容を申し上げますと、人数では小学校では 10 名から 20 名の学校が非常に多く、中学校では 10 名以下の学校がほとんどであるというようなこと。それから、活動内容としては書棚の整理や図書の修理といった図書室の環境整備が最も多くなっております。

そのほかに、小学校では図書の読み聞かせ、中学校では図書の貸し出し返却の補助が多いというような傾向が出ております。

活動日数、それからこの活動の内容等について調査をして、非常にいい事例も集めているところがございますので、そういうものを各学校に紹介をしたりしながら充実を図ってまいりたいと思っております。

◎陣内泰子委員 今回の調査は、読書ボランティア、学校サポーターの調査で、今御報告があった内容のまとめになっています。しかし、私が求めたものは、学校図書館が一体どんな、かぎがかかっているとか、いつあいているとか、そういったことの調査、環境の問題を見ないと使えない、また使いたくなるような図書館になっていなければ子どもたちも行かないから、そのあたりを調査していただきたい、そのように要望をいたしたところです。

ぜひ、今読書指導員、図書ボランティアの活動状況のまとめができたことを踏まえて、ぜひ実態調査、かぎがかかっている、あいている時間及び日数、それからそのときに人がいるかないかとか、学校の中のどんな場所にあるかとか、そういうようなこともぜひあわせて調査をして、今後の活性化に向けていただきたいと思います。

読書のまち八王子に関しては、この間、補正予算並びに今回の予算においても増額をされています。しかしながら、2011年度はデータベースの予算となっているところなんです。補正予算においても図書の蔵書、買うという形になって、これは片山総務大臣の住民生活に光をそそぐ交付金という中でなかなか光の当たらないところにもっと予算をとという形のものを活用してのものです。

そういう中で、教育長は常日ごろ、教育とは人が大切だということをおっしゃっています。しかしながら、今回学校図書館についての予算を見てみると、もちろん図書の蔵書も必要ですけれども、またデータベース化も必要ですけれども、データベース化については読書のまち推進計画においてのその優先順位はそんなに高くないんですよ。やはりどう活用していくか、人を配置しながらやっていくということに多くの期待が寄せられている、そこに予算が向かわなかったということを私は大変残念に思うわけですけれども、そこら辺について、今回の学校図書館支援事業について、教育には人が大事という教育長の思いがなかなか実現されていないんじゃないかと思うんですけれども、そのあたりについて、なぜこうなったのか、なぜ人につかなかったのか、そのあたり御説明いただきたいと思います。

◎石川教育長 質問者と私は多分同じ考え方を持っているんだと思いますよ。基本的には、個々の図書館の充実、その充実した図書館を活用する上でそこに人がいないとこれはうまく機能しないわけで、それをやりたいのは山々です。だけれども、現状から考えて、それを全部とても一斉にできませんから、幾つかはできるかもしれませんけれども、それよりも全校に影響を及ぼすというようなことから、図書のデータベース化をして市立図書館との連携を図ろうと、こういうことで、とにかく今できることをやろうという形でそれを実現をさせようとしているところです。

◎陣内泰子委員 ぜひ、やはりデータベースになってもそれを使う、また図書館があいていなければ本も使えないということを教育長も十分御承知なわけですので、今後において学校図書館サポート員の増強、ないしは八王子、100校以上あります。そこを今2人のサポート員、また退職校長合わせて4人で5年かけて回るという、そういう計画だけではとても支援計画になっていませぬので、それを前倒しにして進めて充実を図っていただきたいと

思います。

次に、子どもの貧困対策について、教育現場でできることについてお伺いいたします。

就学援助についてです。昨年の決算審議の折に就学援助の非認定の児童生徒が1,127人もいる、申請者の14%にも当たる数字となっています。今、大変な生活状況、市民生活も厳しい状況の中でこの就学援助、これを申請する子どもたちもふえている状況にあります。

そのような中で、認定基準を緩和をし、ぜひやさしい教育、子どもたちに未来ある教育をと訴えてまいりました。認定基準の緩和に関しては、2011年度予算では取り組まれてきておりません。この2010年度の就学援助制度に関して事態は好転しているのか、私はそうは思えないんですが、今回、2011年度予算でこの基準緩和について取り組めなかった、そのあたりの認識、それについてお伺いいたします。

◎坂倉学校教育部長 教育委員会としましては、所得が一定限度以下の方々に就学援助制度によって小中学校の児童生徒を持つ家庭に対して援助をしているところでございますけれども、この内容につきましては以前もお答えしましたが、他市の状況やその他の状況をかんがみた中で現行の範囲で支援していくことがふさわしいというふうに考えているところでございます。

また、生徒への周知につきましては、学校を通じてすべての児童生徒に説明書兼申請書を配付しているところでありまして、今後も真に援助を必要とする児童生徒の保護者に対して制度の活用が図られるよう努めてまいりますのでございます。

◎陣内泰子委員 ぜひ子どもたちに家庭状況によって教育を受ける機会、それに格差が生じるということのないように取り組んでいただきたいと思いますし、また、2010年においては児童生徒の数が減っているにもかかわらず申請の人はふえているという状況をデータとして伺いました。そんなところで、教育長も昨年の審議の中で我慢のしどころとおっしゃったわけですが、もうそういう意味では児童数が減っているにもかかわらず申請者がふえている、我慢の限界でもあるのではないかなというふうに思います。

そういう中で、就学援助の基準の見直しを改めて求めると同時に、今回生活保護世帯向けに始まった学習支援事業のようなものが要支援の子どもたち、準要保護の児童生徒の子どもたちにも学習サポート事業のようなことをスタートできないのか、学校教育現場の中で何とか教育力によって子どもたちの未来を切り開ける、そんなサポートをしていただきたいと思います。それについて何かお考えがあればお聞かせいただきたいと思います。

◎石川教育長 考えることはたくさんあるんですけども、だけども、すべてあるものがないとできないものも多いんですよ。ですから、頭の中には随分構想も持っていますけれども、とにかくできるところから小出しでもいいから確実に現場に反映されるようなことはやっていきたいと。

予算の獲得についても、市長にも何度も頭を下げてお願いはしていますけれども、全体の

中身、財布の中身がふえるどころか減る方向ですから、あとはこれをどうやって使い分けるかということだと思いますので、非常に難しいですよ。ですから、言葉でふやせ、ふやせ、これもやれ、あれもやれというのは、これは簡単なことだと思いますけれども、やる側にとってみるとこれは大変な負担でして、でもやはり将来の社会を担う子どもたちのためにはとにかくできることはやりたいと、こんな思いでいます。

◎陣内泰子委員 確かに、税収が減っているという中で、今の切実な教育長のお言葉もわかります。でも、2006年のときというのは八王子の税収は今の2011年よりも少ない税収の中で、そしてその中で一般財源として教育費に充てるお金、それは来年度の2011年度の予算よりも13億円も多く一般財源から教育費に充てている、そういうことだってやれるわけです、やっているわけなんですよ。だから、今先ほどもありました、お金がないわけではなくて、その中でどう配分するか、そのことが大きな問題だと思うんです。

そういう中で、今、教育長のほうからは、市長にも再三お願いをしているという言葉がありました。そんな中で、ぜひ市長、やはり教育の充実をとということを掲げる八王子として、今の教育予算、やはり問題がある、もっと上げなくちゃならないというあたりのことについての御見解をお聞かせいただきたいと思います。

◎黒須市長 単純に何年度と比較してどうこうというのは私は適切じゃないと思いますよ。内容をやはり見なきゃいけませんよ。やはり大型の施設の投資なんかがあれば、それはその年はがんと伸びるのですし、ですから、内容をもうちょっとよく吟味をしていただいて質疑していただくことが適切だと思います。

それから、金額についても、これはやらなきゃいけないことはたくさんあって、教育の場でも今は例えば、細かいことですが、トイレも前倒しをしてきれいにしようとか、それから耐震の問題なんかも、これは一日も早くやらなきゃいけない、それから今度は冷房機を設置しなきゃいけないという、こういうやれやれということばかりおっしゃるけれども、その財源というようなものを示すことというのは全くないじゃないですか。

ですから、それでは幾ら一議員の立場というのは、私も議員をやっていたからよくわかりますよ。わかるけれども、一定の責任のある発言というのが必要だというふうに私は思います。

◎陣内泰子委員 財源の話になりましたけれども、次にまちづくりの話にいきますね。

今、優先順位の問題ですよ。教育なのか、まちづくりなのかという中で、私は今、ここにおいてそごうの撤退という中で八王子のまちづくり、どうするのか、大きな課題を抱えている時期になっているかと思います。

そういう中で、市長は中心市街地の活性化、間違いなく進んでいくので、そういう中で理解を示してもらいながらも、でもこれからも頑張っていく、そういうようなお話がありました。

しかし、どうなのでしょう。私はもう一度この中心市街地の今たくさん出ている計画、旭町・明神町地区の開発、それからマルベリーブリッジの延伸の問題、そして南北の回遊性の問題を含めた中で、特に旭町・明神町地区、それからマルベリーブリッジの延伸の問題、これはこのまちづくりにおいて大変重要である。そしてそれは着実に推進していくというようなトーンのお話がきょうの議論の中でもつづいておりましたが、やはりそれはちょっと待つてと思います。

というのは、そごうの撤退という中で、今、そごうの問題、あそこの中心市街地がそごうがあったことによってできてきているこの旭町・明神町地区の開発であり、マルベリーブリッジの延伸計画ではないのかと思うんですが、まずその影響、それについてはどう考えているのかお聞きいたします。

◎西田まちづくり計画部長 旭町・明神町地区周辺まちづくりにとってそごう撤退の影響というお話ですけれども、本年2月に策定をいたしましたまちづくり構想につきましては、この周辺地区の周辺12ヘクタール、ここを対象としておおむね15年後のまちを想定をしてこの構想というものがまとめられております。このそごうの撤退ということについては、この構想自体には特に大きな影響というのではないと思います。23年度、来年度から旭町・明神町地区の2.7ヘクタールの具体的な検討に入る予定でございますけれども、その中ではこのそごうの問題も含めてさまざまな角度から検討しなければならないというふうには考えております。

◎陣内泰子委員 今、15年先の見通しの中で少しずつ進めていく。そういう中で予算においても実施計画の予算が7,000万円ほどですか、計上されているところです。もちろん先の見通し、それを今からやっていく中で計画を、そごうの影響も考慮しながらやっていくというお話であります。私としては、もちろんこういう構想がまとまったという中で、この問題に関しては、やはりそごうとの関連、そごうのあのテナントがどうなるのか、あの駅ビルがどうなるのか、それを見定めてからまた改めて進めていっても十分間に合う問題ではないかと思えます。

その一方で、子どもの教育、そこにもっと予算をつけていただきたい、そう思う次第であります。

そういう中で、このマルベリーブリッジの延伸計画においては大きな影響はないというお話でありましたが、このマルベリーブリッジの整備に関しても、これはもう大分前から、いろいろなことを何とかしてほしい、そういう議論がずっとありました。そういう中で、ここにおいてこういう計画がまとまったというふうに私としては理解するわけですが、それであるならば、今までなかなか取り組めなかった、であるならばもう1年、2年先に回してもいいのではないかと。その分を教育費に回してほしい。子どもたちの未来は1年が大きな勝負です。そういう意味で財源を確保していただきたいというふうに思っているわけです。

そういう意味で、もう1点伺います。

このまちづくりに関して、私はまだまだ議論が十分になされていないというふうに思っ

いるんですね。そういう意味で、そんなに拙速に進めないでいただきたいということもあります。それは今回の南口の再開発のバスの便、それが回遊性の中で本来であるならば、大きなこういう問題になる前に担当のところできちんと対応できているはずであったのではないかと思うわけで、そんなことを考えるならば、この明神町・旭町地区まちづくり構想、マルベリーブリッジ延伸、これをぜひそごうのビルの今後はどうなるかをはっきり見えるまで凍結をし、その間の事業をぜひ教育に回していただきたいと思います。ぜひそれについての御見解を市長、お願いいたします。

◎黒須市長 これはやはりバランスの問題だと思うんですよ。これは教育費も大事だと思います、私も。やはりこれからの八王子の、あるいは日本の担い手である子どもたちのために教育費を充実させるということも、これはまさに大事なことです。しかし、総枠が決まっている中でそれをどう配分するか、じゃまちづくりをやらなくたっていいんだ、そう思っている人というのは私はいないと思いますよ。

ですから、今回のそごうの撤退についても、それはまちづくりがおくれているから撤退したんだと、こういうことを言われる方も中にはおられるんじゃないかな。ですから、そういう面ではやはりすべての面で、福祉の充実というようなものも大事なことでありますし、すべてはやはりバランスをとって、そしてこの分野だけで特筆して予算をつけるという問題ではない。それはうんとお金がある時代なら別ですよ。今のような厳しい時代にはやはりどれだけ上手にバランスをとるか、このことが何より大事なことだと思っています。